



80
79
78
77
76
75
74
73
72
71
70
69
68
67
66
65
64
63
62
61
60
59
58
57
56
55
54
53
52
51
50
49
48
47
46
45
44
43
42
41
40
39
38
37
36
35
34
33
32
31
30
29
28
27
26
25
24
23
22
21
20
19
18
17
16
15
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
0



新選
俳諧 明治歲時記 柴草卷之下

東京 小築庵春湖閱
香楠居幹雄編
佳峯園等裁校

切手の昔匂は限られた車の所へす
文泰平治もまた。切綴きやりて縫り詰ひ
よと袖をさしととの通せまゝに勿論まれと覆
匂ふまゝて匂と切る姿な々生きはされ上乃匂
めうたるゆゑ來て余情を含める能を近故
ヲ想焉も天。尔。衣。波。ハ。大。う。ナ。り。と。ひ。ヌ。切。綴。ハ
といふとやうやうとしてたゞなりと言ひ切綴ハ
秋どくのはらゆな／＼とくとも三十一多よばね
ひと十七多より扱ひそて取扱ありのうむね
あきへんと用ひて妙。まぢり壁へ。○山海東
て。何。や。ゆ。草。糸。○。ふ。想。事。く。起。そ。些。そ。

は。○は人殺母を主はるをゆうが是ちも
詔勅と附んうひよ様をもつて令多とすた
まの也。仍そのうるゝ現在の。よて詔ふ様へ
え來べ。されどやうへやらんの様なまつたる
きて行やうんゆうとくじりを下へ次へせそか
一きと二きとは又まへて以てのけふな
れたり。次にこそならず。まき。深かづくまとそ。
ゆゑかと約めたら。欲する勿切内乃は多繁あり
たり。すの多。悔て。余素波。のま極す。多。まき。す
なまく。す。多。ひ。知て。後。折。よ。ま。ま。す。なり。○。洪。洪
禹。通。ふ。多。多。の。ゆ。あ。よ。教。教。在。竟。ぬ。源。度。の。閑
ち。見。も。裁。在。竟。ぬ。○。い。ふ。全。き。を。教。教。在。竟。ぬ。○
ど。ひ。セ。う。ら。ま。と。も。ひ。を。て。ても。あ。う。され
ま。ま。よ。教。教。か。と。考。て。初。か。ハ。教。教。か。の。ら。志
を。う。と。ま。な。ま。り。也

○本辭圖○辭一變圖○辭二變圖

は	けん	きん	まん	めり	ちり	けり	たぢ	にぬ	けり	き
そ	けん	きん	まん	めり	ちる	たる	けり	ぬ	ゆる	る
こ	けめ	まめ	らめ	まめ	め	なれ	なれ	けれ	なれ	ね
の	けめ	まめ	らめ	まめ	め	なれ	なれ	けれ	なれ	ね
う	けめ	まめ	らめ	まめ	め	なれ	なれ	けれ	なれ	ね

き　昌吉のき。きは既の義なり在既ハアリツキ也見既ハミ
なりツキ也既キキ。ツキ也既ハキキ。ツキ也既ハモテ也在既見
既既既とソラウカ
○風すゝむ行うまのせも桜花匂ひあぬよちる。ハラウリキ。
○うぐりすゝくを思ひてぬをなまのを教へてもハルヒテモテキ。
徒。山城の咲ケリナシ。山城の花。有ル
日。余立候をすすまうをまうせてま。義所

切字ノ部

下

二

○をすすりあひすまます歌若の歌を詠さめり

○歌はうれり援本の歌を詠さめり

○山に人を付見の花りみち

○袖月の袖もつて詠あ

ツハ聲くのきを一ツほ二ツほ、すゝひて詠ふ

○畢のぬなり。なりぬハ成徳。たるぬハ絶徳。志ぐぬ

徳の義也。もか徳。きぬ。根本性也。徳も徳は徳云也

モモアシに附す成畢也

素の時す爲葉すまむ東山を教へ居ますはよとひぬ。

徳○新らき命となりぬの事。恒九

因○秋風の心動きぬ。總もうき

モ○お詫をも小家も並ぬ折たき

モ○やうて死ぬけきも尼名底娘の事。翁

ハ○志もくふ。草ともね。春の月。次湖

徳○松拂一枝物もば床もそり。相鳥

モ○而有の約見色。たるハ而有ル。たれハ而有レ也

モ○うめたりハ籠而有。えうりハ得而有。うきた

リ。ハ深而有の約也。

○春ふを復ましむら一白羽の詠也。たりあめはうら

モ○秋の時すもむ。春ふけり。一草ともね。春ふをも

○古ふとすりて。春ふの事。春ふをも。春ふと。花。吹けり。

徳○松とりて。ちの旭と。春ふけ。是不用

ハ○春の蒲。春ふの事。春ふけ。是不用

モ○茶本吹風も。春ふ。是不用

○秋の時すもむ。春ふけり。一草ともね。春ふをも

○古ふとすりて。春ふの事。春ふをも。春ふと。花。吹けり。

徳○外づきを。やれ。はく。なり。春の風。まき旅

モ○山ある。旅のやうなり。高の會。乙二

○金の義也。めり。ざらと。因流。ちりぬの。ハ散多

免り。と付たる。うきぬめり。處ぬ免り。の

ともめり皆も形容をききてその施行様をと難ふ
うるのとくに教る際の様やや深き方體もすう
た極ふしやうるく方體も策ニ極む一や然見ゆ
るところ也

○鹿島川うち御のを急とへとめうるもんもすうり。

ハ ○薦ありて故にちぬり。重々家 菊城

モ ○さうだれの寫すも深めりねのを 李衡

徒 ○大震おろ上と流るる。わ之

んと先と引なるよもあらばなと假名を先えんと
書みあれ匂代首を差す。先づより多く先しを記

のちくあてあるとてをもく。

○うかがひさをすりて足してのうむと一絆即きは走すゆど

○月夜よ衣ハ拂ん船高すぬまてのはうつろひぬとそ

徒 ○えりやあるづきのを刀佩ん ち本

ハ ○衣ぬ志取ぞ。津んと移のま 桜良

モ ○古も衣音きさんと重の月の里 外二

ま ○手すハむ乃止するなりとつるも水太つうなる秋

へ大方乃むのまハ絶えせた後なる。たのも○たすむ

○ともむ○うすむちいのむスニナセ候む。○あつむ。

すすむ○くも○たのむのむをもとのむをねとよさ

いと美なり○こんす。ハ兄相あ。きこのそ。ハ因ゆめあ

○つもす。ハ言ひあ。はてま。ハ侍ひあ。○あもはま。

10.ハ思ひあ。ちま。ハ侍ひあ。○てま。ハ畫ひあ。乃

きなり。

○山里よちりぬま。うち櫻を匂ふまのりもあらひさす。

まきと上下する合せくるる葉

歌人

○娘 さもあられもやのよこへま。あらはとくのとそれよ。
中者よゆる多よよよよらうりて再びまととのえ
○夏ぬよちるうじんの何よませは花豈き拂ちまよ。
ちのまよませよ拂りてまーと今ーとま
○女ゆゆあそそ拂乃なゆりせばまかくろのまおけの
あませとせと約めたり
○玉毛を桜くらす。きあふことのひとくがまゆく一アセバ。
せはハああよそまーと合せたまく
徒○きく西へ終業の壳乃た。お。 神久
モ○度無引。やもう。鹿。ま。重。 三吉
らん は挂金錢の酒なり。めり。ざらりと深く紅葉
とす。もくろて粉と酒なり。おとす。もくろと粉と酒なり
よや何事の指揮ありてそのまよと詰ふ又主申
す何と云すを詰つて詰つても角一
○嘉えて宿を喫す。うつ園の向の原もみち。めくらん
○冬の老いたとなき。日よねごろすくせのねらん
○原のねの花をうしも見る。うんぬでたふもんを惜むに
ハ。桜の拂一茎も今もほやらむ。成美

武藏玉川より

徒。妻の時や。まき材。有。さん。 三吉

ハ。昔あい。いわかる人のなり。ぬらん 成美

なん。玉一種。お里先を常せ。なん。ハ故徒の義そ。ぢり。
なん。ぬ成徒。くれ。なん。ハ故。徒。ことえすん。ハ故。徒。
おいてなん。ぬ。徒。お。くれ。なん。ぬ。湯。徒。の。ま。す。
死ひの。なん。ハ。故。徒。す。も。と。あゆ。あら。を。唐。ま。く。欲

マアと欲う也。うう欲う也。おのつづく形をさめ
含めるなり。

○春まで。ハキタス。こうはありなく君の。ハキタス。トケチ。

○身も北も。きよも。まくは。も。かくも。風。ふせん。

○君とまへ。あく。こうと。君も。た。まの。ね。山。沿。も。こ。そ。え。

モ。名す。わく。康。も。弓。を。ん。康。弓。

モ。月。杵。

○年。月。も。れ。鷗。の。海。草。も。さ。り。な。ん。月。杵。

けん

けむ。の。け。本。種。約。ま。る。也。本。種。と。ハ。古。今。の。欲。よ

○12。5。の。年。の。本。種。ま。ち。あ。う。た。み。の。月。そ。本。種。

行。さ。

○よそ。の。さ。き。の。す。一。み。と。ま。細。川。流。と。な。い。色。訓。物。けん。

ハ。○福。金。ハ。生。て。出。て。け。ん。も。松。魚。三。翁。

ハ。○を。し。く。り。ハ。よ。け。ん。夕。は。ト。鱗。甲。

徒。○遙。手。の。墨。を。な。れ。け。ん。松。の。月。李。嬌。

○辞。一。變。の。部。そ。の。や。何。む。せ。ひ。

○去。の。反。一。○。よ。ひ。へ。も。往。去。行。○。む。う。も。血。去。也。○
西。も。日。往。ち。の。上。所。也。あ。り。し。ハ。往。去。○。見。一。ハ。見。去。○
き。一。ハ。聞。去。○。走。一。ハ。走。去。の。さ。なり。遇。ち。き。あ。

一度。え。て。そ。あ。や。何。の。結。ひ。之。き。へ。切。れ。し。ハ。縫。く。

○花。より。も。人。を。仇。す。歌。き。り。つ。き。を。さ。れ。ま。意。ん。と。の。見。一。

ソ。○自。法。相。乃。寂。か。風。を。暮。り。○。聖。毫。

○塔。乃。葉。や。十。ツ。十。の。祝。ぎ。○。保。佐。

ヤ。○杜。宿。き。の。ふ。や。古。の。宿。う。り。○。ミ。奈。

○何。よ。ひ。て。む。の。竹。つ。る。歌。も。う。○。巨。冲。

○意。有。意。有。の。幼。う。也。○。ち。ち。○。ち。ち。ひ。け。ち。○。ゆ。る。
山。ハ。ま。の。あ。う。り。め。タ。ま。く。も。の。け。て。く。み。す。も。あれ。と
は。う。ち。の。く。ま。の。あ。う。り。の。う。す。も。の。け。て。く。み。す。
る。の。義。う。る。も。ま。き。の。ま。ま。の。成。か。り。つ。よ。つ。の。
一。度。え。て。そ。あ。や。何。の。結。ひ。之。き。へ。切。れ。し。ハ。縫。く。

○め。ま。が。く。と。宿。す。あ。つ。る。ひ。の。ゆ。ま。り。と。す。も。宿。く。と。魚。屋。

ヤ。○里。人。も。歌。や。や。つ。る。歌。あ。み。○。主。旅。

行。○。主。月。と。何。よ。く。て。様。く。○。主。宿。

○何。よ。ひ。て。む。の。竹。つ。る。歌。も。う。○。巨。冲。

○畢。の。ゆ。る。と。序。ひ。達。と。主。う。す。也。禮。の。宿。意。往。

思。往。の。主。也。

○津。波。島。通。す。舟。の。を。も。う。よ。と。旅。房。意。往。意。の。室。ち。

○禁。禁。ぬ。と。服。う。る。や。の。に。も。う。よ。と。旅。房。意。往。意。の。室。ち。

ソ。○橘。の。香。そ。う。き。り。ゆ。る。主。う。室。野。夕。

ヤ。○陽。光。や。う。つ。き。り。ゆ。る。香。火。上。高。弓。

ソ。○主。く。と。墨。そ。ん。ね。う。君。火。李。嬌。

ぬ。ほ。の。一。精。そ。石。の。ぬ。う。君。の。幼。り。た。と。う。の。本。

て。も。思。な。く。も。本。も。足。ぬ。と。通。○。主。く。と。う。君。

吾。す。う。君。也。

○も。う。と。思。ひ。て。も。う。君。○。う。君。と。主。う。君。の。故。な。く。

ノ。○。時。あ。ね。ひ。又。ね。風。の。た。く。の。ぬ。○。主。技。

リ。○。う。り。う。と。待。う。そ。降。く。ぬ。の。雨。○。主。果。

下 ○ 五

ハナリの一時見て而育テアルの爲れ。旅へ往へたりと
たら。して幼きまことに。身を失ひ。もとより。
○吹風を爲す時々多^シ。花を落す事あつた。
や。立向へ表よし女乃ゑひる。 肩柳
ソ。足ぬきよ角を落す。紺の麻。 えきね

ケル。アリの事もあまうけりとまである。
ける
○きこより思ひ。うけぬ。まおのるよりむとく。山を。
ソ。タはとよとて。男すまんける。 三角
ソ。書のり。竹のふせ。そまうる。 羽笠
ソ。きよの意敵アーブル。 そと。無ひ。 武陵
ハナリの。あつて。おれの。ゆれ。舞なり
ある
○ことなく思ひ。ひまく。あ。さの。まかた。まき。する。

何。何をとなく地を這て走る。或
ある。
○知りけんすてもうそゆの川流のままで走る。ちあ
ヤ。やろもあてもうやゆめ。丘の縁よ。三毛作
ソ。川筋のあともうゆ。走る。走る。走る。走る。
人。前す向むかふれどもこゝもる粉の結びます所あ
る。ままたぬよ。まー。らん。さん。けんともまある。

○七年のことをもとめやうら
何の人のことを何よたとくむ。世の事。李壁
ヤノ。あやしき。まよのゆきのゆきん。葉嵐

ま
○春の谷よりのよみかづく春本とてを詠うのあらま。
○足りんむなましの里に桜花かのちりをえほそ吟うま。
何○月花よ詠うのこそをや。ちるのふ 起石
ソ○ソうそとおよ向ま。ゆの月 まゆ

○袖ひきうてぬけひやれぬまくとまくと風やぐらん。
ヤ○との鼻はあやえむりん船舟 秀吉
ヤ○鳴くゆ今やうらんみね 三毛舟

○立風門はうちも見て海より風中や絶えず。
ヤ○そよぐよも遠くや遙かなまの山養翠
ヤ○あのもちも風や立風門村翁詩竹

七

ヤ。本鬼も人や。叫けん。玄の月。み在

○辭二變之部 乙の結び

きのこをもつてゐる。

○意する。此處を早速立てよう。人あれども。思ひ知らば。
○きのよそ。あなた。おなづか。おだねり。麦雨
○憤る。そよぎ。立てよ。か。秋の秋。月夜
これ つ。の。ア。夏。つ。ち。ア。夏。つ。ま。也

○どうぐをすまとくをくらべてすみやかにあきるき
○咲てもう花ともうつまが木も　菊成
○やまとくじゆのぶなとそなむ　著要

○考の秋來るにあそそ遊き物と思ひよめ
○口まめとそ思ひぬきゆめ考 菊成
○極くう得そ知ぬき舉月五 秀吉
ねのて夏ぬ。二夏ね也

今本ノ角ノ

。是とこそ。腰を免れぬ。もね魚。夢太。

。行きましも見えぬ宿舎の前で風、僅き身みを清す
流れとそ今ひ渡るれ。年月雨。之ま旅
音ととそ。誰もやなれ。ゆく
東水

けれ
けりのこゑけれ
けりのこゑけれ

○春風で身のまわりはさわやかに
○えりの毎の日こそが外れ 畠
○名も色も時そよけれ 桜綱 菊成

なれ なりの 亥 たる 亥 すれ也

○うふとすかくあなたれ是めぐらむる所もあまきりのを
○解れぬこそ。多の多。され林筋。夢古
○其保名う首の骨。こそ。軍。なれ。 仙化

めれ めり。の一度める二度めれ也

○えとそぞりもぬつ。れゆ木よひまつちる。あつらうを
○えとそよがとつ。れ扇の考。えまく
○ゆの親もあと。れ領をたまふ。柳波

めんのを愛め也

○角を立つて、身をもよおして、見ゆる浦へあがむ。そ見る
○筑ともちを、磯ともちを、そともちを、タタキ。主角

。独りこそ。おめ川行の波まくら。こまき舟

まのまの三度まののせ

卷之三

○夏の月をりあこうと思ふまゝの秋の書
○清き紅葉と月とをすまゝの
五 在

らんの愛らめや

○本居宣長の筆

。岩轟の力の事とせん。重五
。尼れども作もあまら。涅槃像
完岱

を。の。て。度。を。め。ゆ。

卷之三

弟根と。そとくする。ぬ。風流。　主。根
午時。そ。うちへ行。す。の。蘿。　竹

人
の
文
化。
也。

卷之三

。春深川や。主の事とそ解ふ。め。柳葉

。因縫ことそ約もあらとまつた
完岱

お子の活き相の結しあれども必ず

御書法ひくらじゆふかやまく知るにあ

は國をありあまの切継り

五
六
七
八
九
十

己亥年二月廿九日

まうかのちよまよめにれと初心

其の後、志士の爲めに、

服ふまう。やうとす。初ね魚。素生

服うる者をそぞと見ゆ。お杜鵑とす。はるか壁を陰へりとてある。よしとほきとほきと。よしとほきとほきは時作の時作をもとむ。なり。八月。そぞくと。然里香ひもくと。うまいをのぞう。あれりと。お

二百三。二百三。是こと。一。也。立高

葉をれつ。葉ひつ。梅のせんたり。詠。同
次の二句は二重とよびます。もよまよのこと。よよたと
つぶ葉それも一つ。壁ひも。梅の壁うそと。委
しゆのくさ。梅のうす。叶うそと。たそい。もよまの壁
みゆきと。格すり。

二段
えりの晴。二りの柳も。夕。丈。左
是もまた。うす。かう。作なり。心切事ある。す。抱を
ぬすり。

と。と。と。と。あらきすの。青椒。蕊
や。飛。夕。夕。や。秋。ひ。るく。の。難。の。全

と。灌。や。花。の。そ。の。と。亂。卦。亂。草
たきうめのや。そ。と。秋。ひ。と。そ。花。と。か。ち。と。夏。ひ。陽。同。
と。白。き。花。と。あり。と。の。秋。ひ。花。く。の。形。ある。難。す。うり
くる。う。政。と。生。化。の。が。術。と。歌。う。だ。我。た。り。や。春。の
な。き。の。内。や。と。そ。と。主。歌。と。き。の。や。う。と。そ。歌。と。春。の。居

う。う。や。す。う。唐。あ。う。三。う。鳥。の。あ。北。助。あ。う。も。仰。う。
一。次。の。を。流。う。の。の。ち。う。と。そ。と。る。た。の。を。流。の。七。
さ。ぬ。と。を。傳。」た。も。セ。

五。觀。三。樹。や。の。つ。づ。ら。わ。う。る。身。卦。一。茶

も。哉。芳。蘚。圓。豆。豆。内。か。乃。名。の。下。山。鹿。言
子。け。の。仕。す。放。て。日。う。も。友。も。言
も。う。す。う。歌。と。涌。り。て。ソ。す。ま。う。○。ち。う。す。洋。○。友。も。洋。
と。歌。を。す。り。

○。の。ん。う。け。る。句

又。た。う。し。ち。う。う。比。川。の。川。輪。扇
塔。内。益。實。

塔。内。二。百。人。う。別。ま。の。松。全

未。穿。よ。行。未。穿。の。袋。や。板。屏。全
市。中。と。直。れ。て。自。ハ。陽。田。川。雨。れ

うるより見る。その事も。夏衣。後。電。
○ナシ

哉之部

是れ此序と宣まる難卷也
喟をぬか故とまことぬよ越前
福井にて月の輝き柳の下
さくらなく雪をとふすとい
落葉そぞれ色の如くぬ桂も
ある能内梅の木に取水能内
波千草すて浦の酒の碑
兔角にてわの花者むねすれ
ちゆひひのまわら扇ひ
日向薄紅のうそれ墨をれ
ひととおもての書つる筆ひ
うとうとへりとめれなぬ田嶋
万樹

此のうへよまと敵をもてる
ひゆとおきて獨り扇ひ 角お
花よりも増すもぬの秋まつた
拂ありとほさまあるを慕い 清き
秋の月のさうて待まる極のな 百可
一そよご拂くとぞ仰られ 枝を
拂まひとぞきれに匂ひし
高むをぬ内と奉あ花たりな 松岬
きららとぞきしてある事すい すあ
わきとあてゑのまむる本様に 楊枝
香めりをあへ き風見引 すあ
けくはききみふとあまつま
まれぬねねねあつてまきれ おま
津くせすやまぬもある時あらま 万有
あまて時めくやうなふれ 井國

夕富士あすあはやまきか
うじ城のすつまきとも尾衣い 角を
ぬねりやまとほら鳥か 黑鷺
雪晴め時あま まし旭
やつくりと詠よと候牡丹うな ま陽
言ひて三けんをうと水鶴され 花全
眼の見る色よ高うるをか 濁水
満つと二面の前柳 うな ち山
あくつたる枝あとほら筆舞い 二面女
茎の肩やう枝地とほら筆舞い え枫
柄ぬきもんよううらきうな 小み
あさす鈴うちうらきひれ 聿本
ちづるときあきおまけ清水れ 旭安
そべとく畔をもひとせばれ 城國
年れもつとめきぬす柿石い ち中
りひのあらむと木のめか

尼寺人はてそぞれ夜の匂ひか
唯の木の匂と桜は嵐うな
花咲ていづはふわねうな
ほするに伸び柳のまんが
ゆきの葉あらり鳥のな
へりも拂ひなづか花をのな
つまも名のいふまわ
つまもあのいふまわ
めのゆてあのるせ晴きか月見
里やの竹とねむる空虚か
改めてつるんの浦考つる
砂とよ眠つきてあるむ魚
見れぬかとも書とも牡丹
塔のまことうらの匂うか
あるとあくまでもうまか
めてあて二種すたる田植うな
書もと風とさうのまき柳うな

時あゆみをほれ枝のまき地

木ほれて鳥もぢづぬる三川

むす組のあらわす白の見育れ

秀時てとまつべりと北湖めび

うかきてわくとまし北湖めび

とんやうれい花とある日義

もとわたり言とわたり月の雪ひ

まつゆゆくとまし月見うわ

おきてふあもうちうだ北湖めび

掛橋のゆきとまし煙外

照りつみて跡く夜のりとま

乳とあまことまし横峰の山

枝つきよ落よ松の山とま

や内部

ゆりやかなた端の紙萼
あはれ充本の色やまのあ
市井

三甫

英経

圭桂

圭樹

伸樹

治兄

義翠

義経

義友

文友

黙雷

る岩

休友

梅好

其好

梅志

梅好

梅志

時あゆみをほれ枝のまき地

木ほれて鳥もぢづぬる三川

むす組のあらわす白の見育れ

秀時てとまつべりと北湖めび

うかきてわくとまし北湖めび

とんやうれい花とある日義

もとわたり言とわたり月の雪ひ

まつゆゆくとまし月見うわ

おきてふあもうちうだ北湖めび

掛橋のゆきとまし煙外

照りつみて跡く夜のりとま

乳とあまことまし横峰の山

枝つきよ落よ松の山とま

照りつみて跡く夜のりとま

乳とあまことまし横峰の山

時あゆみをほれ枝のまき地

木ほれて鳥もぢづぬる三川

むす組のあらわす白の見育れ

秀時てとまつべりと北湖めび

うかきてわくとまし北湖めび

とんやうれい花とある日義

もとわたり言とわたり月の雪ひ

まつゆゆくとまし月見うわ

おきてふあもうちうだ北湖めび

掛橋のゆきとまし煙外

照りつみて跡く夜のりとま

乳とあまことまし横峰の山

枝つきよ落よ松の山とま

照りつみて跡く夜のりとま

乳とあまことまし横峰の山

時あゆみをほれ枝のまき地

木ほれて鳥もぢづぬる三川

むす組のあらわす白の見育れ

秀時てとまつべりと北湖めび

うかきてわくとまし北湖めび

とんやうれい花とある日義

もとわたり言とわたり月の雪ひ

まつゆゆくとまし月見うわ

おきてふあもうちうだ北湖めび

掛橋のゆきとまし煙外

照りつみて跡く夜のりとま

乳とあまことまし横峰の山

枝つきよ落よ松の山とま

照りつみて跡く夜のりとま

乳とあまことまし横峰の山

時あゆみをほれ枝のまき地

木ほれて鳥もぢづぬる三川

むす組のあらわす白の見育れ

秀時てとまつべりと北湖めび

うかきてわくとまし北湖めび

とんやうれい花とある日義

もとわたり言とわたり月の雪ひ

まつゆゆくとまし月見うわ

おきてふあもうちうだ北湖めび

掛橋のゆきとまし煙外

照りつみて跡く夜のりとま

乳とあまことまし横峰の山

<

春風や和ろく確の里り方
管や明あかとまそんのきく 楠あ
時のまや物よままれぬ難の外 文雄
をのとくぬとひや管の楠の危葉あ
楠喰や片ねをかほすわなまう 楠居
も吹けんともあもつてとま 美竟
楠の戸や板と壁よ まき 管
テノミチモアヌモトマサム 楠
をよどみぬまき あちや時も 楠あ
ソヤルとなくれの水のあ 楠
チアムアム白匂の夕暮り 左助材
ヨシユキモリやまきの波 楠
ノリヌヌサクシや管も移し 稲実
むく起や行ともして見る福壽井 あま井
秋風や一陣の波 楠
一日や秋の夜あさり起つて
め楓

吹友よりすすりや秋の風 まろ
木枯や枝もつ憐の声すも まろ
寒風や烟もちうりに憐り竹 まろ
石壁や草さくみの枯尾花 まろ
船の波多やあむけにすすむ まろ
竹を吹しむやせれとまわ まろ
落葉の香や月夜は秋夜 まろ
改きや香までとところ まろ
本枯や洞よかよの猿の声 まろ
うれや多すあまきとれ鏡 まろ
花す樹のふとけやまほの枯葉 まろ
武夷のふとけやまほの枯葉 まろ
また戸や列席のやうの簾帳 まろ
永き白一ツ充きと樽のうち まろ
つゆや猿よみうるも猪アラ まろ

時よりをもれたのひや女郎花
音てうら日比やみを相ま
えてよまとよつちや風の虫
をひらひ仰角胸やさの上
ゆめやあまきはゆかめあ
ひとそりしておののくわのあ
ねえやんよきのつまゆき
相物や一本絆まで拂ひま
手作のあねうけるやうに
風よす、ゆのきや吹のけ
誇張や枯涼まづれをま
ゆるあきる秋や病のとき
ねり落竹の烟やうの月
落葉や焚せらぐるゆの風
れどふうちやをまへれき
あままほをのゆゑや初付
松盆

花のせや和まつゝあ戸北山
桜やし」ハかうぬ候もわ
まくまもすまぬりや初候
蟹はもとよせやあト書
季候やまむをれぬ候のを
きよ袖や高き風のまうき
竹のやくすり書き育ぢ
切またれり鼓つともや初候
をよと難事一ちや時も
色ともあれつまある度や梅柳
森川や雪ぬゆうす景元
茅跡へ津や君ともつてぬる
走り神ももるや山後の方を
せれをも思て石川もとさく付
棺あは消えあらやゆのち
枯風やうすりはとまつ候ふ

煙塞のりやわしよくあれある
嘗て嘗てまを傾流一 松雨
あ水とくもやみとくぬひより
とくゆとくまぬひきよ爐
ちり枝や角の下のまはれ
下葉も落あひ草うめ北む
ぬ煙やかく煙もとめて日没
ゆのけやそそ一ま共比を
花垣比教やゆるるあね煙
ふきやかよりとりて被あり
り素やませぬうぬすすわ
松丸も喰や旭の意月の岩
桃もくや清とくても材ちうひ
山吹やおもむをきはとくろ
ち鳥や原ののとくのむ
鶴あれもやまととく様とく

初春やまうひとくゝる旅の味 山月
垣内やまもとむねれ風の音 乙杓
木枯の匂づく障やねの聲 朱玉
ね風ちり毎れ友やを尋 ぬる
夕なれどもやあそばれ風 壮月
谷川や落葉すらくる水の音 逐月
よどりもとや落石せり波 み朧
水音や月あらすへおもれり 痴松
ゆきをまうや月をなみる
書下書き

つゆと木の風へさう」多本立
二羽あまきハ枝もまく一鳥の枝 菊成
香よ白ふ梅よりや」梅著 有流
梅白一また波よの香消て 一葉
あそ白梅の香を」 懸月 ぬ風
月のあすねをむ津一木下喜 十曉

あきのくのへやかす花のむ

月経はとめてあさだあく水

約形を曉一又まき又苔も

笑教まうほりて浦一後の離

月のや野ちす 唐の秋

秋ヨモヤ剣漆あ一かく水

麻ヨリするかす新う一かく水

そよごれをゆきす芦のれ

穂ぬれまし一かく初財ぬ

一かくまくみてみく一海りむ

隼あくらむ君う一門のに

あそれくまくうてもく一柳を在

あそれくまくうてもく一柳を在

通す風も風味暗もす一席のむ

もれー

かきのなきの塵と無縫

城友

花旗

赤糞

可嘯

而玉

西乐

三毛難

御うめ

意風

古義

松央

花妻

年遊

なま牛の春うもす一白牡丹 一葉

芽柳や魚のうすすねもす

ト

まみふなう供よまき一春の香 それ

涼風の味もすまき一山の香 全

まううう

初夏を乳のまゆもすううう

雪閉て扇の風もすううう

相一ゑみ月日よ吹くすううう

香をせぬ曲うす道れううう

タリ

すこ女は笑へ秋教をすううう

春の月水動くすほ柳りタリ

李塘

詩岱

芦夕

一山

其承

柳左

涪兄

程大

本やまはあくび立て時あり
雪れぬをうて苦勞あめり 榆山
夕櫻葉るれどもせきめり
相手

あり

晴よりよし乃ちあま秋管有
すあすりよゆ乃ちももあり幼様
清めどく省やがあり耕せり
つるわく裏もうちり秋の風
渺を海き人あさと音れうき
哉あれハ門拂てありと静の秋

あまうりをうけたり鶴の巣
元山をまみてみうり秋乃月
禁みよぢりて出来うり故老往

在
や

らなまくよしめもやけの花 えきか

空てある本をあそぶに時もあら
松石

守心

乙未風今之モヤ比ヌミタニ
一陽

月の下を走るにて向日葵また秋
あそびきゆゑとよされ冬松汁
左近

又
卷之二
初
校

あもひ又あつひうきをと清江 ま牛

むねま

耳乃ある體もありん拂ふけ 金延
爰もさそわさう結さん枕坂帳 其戒
たとすてつも御せん林の書 岩山
掲禁て板と紙はまんたら千日 楠布
親乃まよ今ま人ほさん秋の書 而洗

そ

詣うある時節を徳とつ仰り
おも是も病のやうりそ恩薦 お木
みくわれそくのくわすを林の書 お湯
みまむけはお是をまくまく月 お茶
詔もまかよまきとえの事 お水

つ

報喜れいらうもア川花のや 芭蕉
芭翁と歌とまよへゆふ涼と 里鷗
詔もまかよまきとえの事 三毛旅

あてりとば尼とけつ雪の約 菅松

よ

肱とまわらそく一さよ花仕面 山賛
掌もめまそー葉とよみふ花 滋元
歩姫ひとづつての事とむむなり 亂威
夏まめー人のあよ枯尾花 五在

み

きとまう君の年りう梅の花 風
ちあ時とやもううごのけーの 薑月
神のくわらやの烟のうを花月 文治
協乃ととめつけとけうさる か舞
吹入で風もゆくの秋の中 まゆ

なり

嘗て唱詠みなり言ひつけ 竹全
おりつき強きさりありみ楓 あ支
黄色いの秋のいろをうせづ わ

そよそよなき匂ひとさうのむ 亨
森ぬとく思をぬ夜の草先風 月夜

切やの表よ
なごみ句

涌てゆるみ水なる波を
上駕すゝむ御所引のま乃君
樹さんとよあらすよあらてせか
景鳥とよもとくちゆ中よ霞松葉
みゆき落葉ともりめて素れ面
此もれてもおきてよ峰竹の塊
本彦やとこけてあらきるの月
童丸るる眼よつけねと月の雲
源氏もと御りておう柳
游のあそび遊よ扇もよ眠る
あけもあらぬあらゆるゆも
時もときのひとひくある
林れまよはるな朝の時も
おま

平乃奴

心うき先づ進ぬまゝも人
色うやけ此處の柳柳
音うをぬ葉根の玉月 烏
音うて鶴すすりぬ玉月
音うぬ音うなりぬ起り寒
脚うゆ風乃うそりぬあと山
猪夷

下
卷

す

乃をのゆく席もすほまくおむ
は月もやもすす細代ち

極佳

時一里を當すもあじがの野
ま

か云

おめぐる仮名をおましめたむ
葉弓もわううに年一葉壁山

李塘

ま

桂重

そよよれおひはす所の細ア

連句之部

歌仙

まよよ夜の尼やうせぢりそり
まよよよちを捨る茅芒
猶子痴狂約本多よま風引
破たよき和乃よきをまと
名以まよく月の小舟を釣り

美

士朗

成美

みかだ

於

本城うよくまを極り時あり
意酒ごく古財字をもてて
主紙をもくおもくとぞ
惜まれよ生きてある眼垂
経よ今まも書一巻斗をも
並ざむよみれ葉弓をとぞ
ほのめうたす唐詩乃あ
一あい山財字三日の月
乞金をなまく一あけをも
誰やうの爲よ似くる考みて
ふ束仕事のをもうたら
行とくか酒とくらはぬのうる
もく年既乃解まつたそら
のつかりとまをとせあはせ
笠ぬひをもさうす善方
吉内も吉次もやうきからん
表

一人槭ひ声ひとり種させ
歌仙

手縫るの本の草を走りあつて
われてたぬはのまき草巻

因み見るもせうら勝に會す

新一郎とまくらん

ほろよい格の袖を押さへ

絹をもり本の月を見るれ

群月よひてとおたかく萩の香

君のりても冷りまく秋

己の身を犯す秋作の朝のあ

をとおなむて人行ふまき

帑うけは秋をそと角とくを

少すこ櫻の絶絶とく

咲花と風もりととぬ角向川

丁乃傳るとのふをもす

歌仙

美朗 芳美 老美 美朗 芳美 老美 日美

花の落する草の木を挂て草の林とくらひ草われ
又ほりオツといひ前を草の草を見ゆけをかうと
つうじよあひてはくはくはくはくはくはくはく
くはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

あくとくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
はくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

眼とそりなみの花を花の霜 みち良

ともとも雪夜夢の霜をうる。 士朗

ゲーのひまむ歳はくとく

老ともれ名もとと相見まくるやらむ

冬糸とととととととととととととととととととと

露まくは命捨ひ 海海よ

ゑぬと川内あれせうき

ちくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

あくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

すすめれやよし月ひゆう

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

歌仙

下 ○廿一

まことに物はうそむの実

ほりは連あわらひうきり

茅板と結ふたりは板とすて

見る方ひもやまされま

妻風よけの匂ひのあるやうも

所のままで近うまと掲せん

片ぞれたまて草くじら月取

露も妻比の林すまうきり

猪鳴畠の藤原ほくと

荷うて扇る名細内瓶

白とせとちきり控へるまことあ

かね隣の時あは言はせきを

芦と枯れに萩のうよしげ

引波川又ある時もあるのと

世間の代えそぞ一き

塙塙もそろくゆぢるうづけよ

すひの二人自利て振る

何ゆも鄙れ依ふの面白い

ほりぬの水井大とみれま

浦ゆきをれこども細やうと

えぬひとたうてゑぬる

歌仙

いとまなご日はうり妻の寝る夜

うらやましきひまは萬を

織ふ持ぬとあひたてとめて

紺御たきぬこしれぬのうす

月とく草せむう種とくうす

すとむ虎と向る桂玲

一あすひとく底乃秋れどれ

大里の秋と拂拂するも

篠張の弓とそろくりや

歌仙

下地のすめを乞ひ意中

胸ゆどもほと御湯よ華す風

腰枕よ取られゆけの侍

ひと運きハ小簞拂うせぬの林

桜笛かけハ拂ひやく

宵代の景向よ棺うべきのけ

す句引なるあれの色

拘れちる侍よ植代よとて

あかすともちく着れ眠る

との衣とあてうけりを世人

言ふすめれ萬物よ皆のて

え未根ひ青のぬけとあり

六月をとこあく墓の露

圓扇よとれこ扇代房一き

赤糸一きとむする絶角

玉たゞしよ詰ひてとけぬ片持

測

測

測

測

測

測

測

測

測

測

測

測

測

測

測

測

測

測

測

測

測

歌仙

唐北夏至本草セラセラ
日暮月うけようはお水
云詠一氣玉湯玉湯高
底らう程駒せむつさ

向ふ先風を拂ひ
手引うるを祀り
枝拂ひ拂きたりまく度を往ひ振
ほきぬりよさせ——新美
なまめくぬつまのをうき威是
乳の思ふを復せ給ひ凡
ての雨も人の心あざ言ひ下
みをうり立をふせあと
所をうるされある宣化月
松樹内に北梢、南あく
瓦ぬれ肩とふすれ松波是
葉蘿は青湯の口とを皆待
一朝は泊の夜せまめを事
をうるうる知ゆく
森の内をねむせら失機且
さめて——海化後立

長くとく年医志北御詔
日も拵ましするん食む。
折方も極古そしてむづく
あまむ地とためり山一
店ひき事因と國の研を
ちやまうたりもつとめ經る
つもかとくまされうるの様
極ひまう運入拂し涙ゑ
接接も薦極うけはめの事
甘竹うかて用一つ漏
牛市北人數度ひもぢくも
地震れ怖ううきまうぬ
比里ても獨れうきはけ引え
かーの嘆うゆく底をぬ
脇と撫く衣を袖をうる
足立ともれう如月のぬ

五十韻

通了病れあゆま見る夕景より
きよゆう斗争以言侍
矣もと般比らるく彦の事
半くる奥比酒り
もくつ以て人を絶うて月比あ
すまぬぬ方へ窓る拂て
降ふたる御毛尼う袖の秋比風
美ひ洞りんあくき
きぬ此あとままで漂ふれ
森のるすり乃ゆる巣
もれ元渕よ移すもつあれ
難むつうるを北ゆく有
詔生ちまて北袖及う袖ひて

行ひゆるはす教ぢりあふ
娘りゆ母れ候みの身をひき
坐もすゝ久とへる情
山うもて袖うれば皆合意
衣冠先うれ也あらう
ゆくよ今そ笑ひぬまん
書す文とて匂ひ祓の香
なまくらぬまほの山をまづく
居くままでよりうるる言
ソウヨリも考るをせばれを達
考ふて度す秋をう成
終うて而うそりせりあてやう
走まくらゐのすうあひむか
おもすく紳士は仕事にて
室の羅をやうとせりく
禁物の薪を一石せね

切てまことにと移るなまく
せもせぬ仕方ぬを又をす
事よりとあけ、吸壳
む言は消えそ立派な月の
うづりとまれハ麻の葉を吹
ひ食は拂よ木のみは落拂り
李眼は尼ても落葉を落拂
耳底よつまである地震れる
一人牙比仕方こそうぬ
物とふるをうづり女郎柳
うづ付ても消ゆる竹の音
鳴りたまへ若ふかく
あきらめるやれば少まじみを
准れ峰と一毫不越を
降りてまよとて落葉東風葉

半歌仙

秀清の黒い毛色ありやう
喉元をとどきよ徳をあらすれや
下戸ともむともよせよ山室
人 佐

水止みをひくや暮れ月
風あくまよ赤やく矣
一百万葉岩の坂をみて
とうやらともとあきぬ翁残
竹皮比もさくは麻も登り
草すくやくと産め鷺
ふとてと巣アリと仕立船
祖少乃の測ノカルせん
於母子せしや意つて是事無
脊中掩するてふね危
左ふうおれて來てある蟻ひ
絆ふの旅のもんづん

佐佐内瓦も月と夜付す

病ぬあを里紀るを冷

桜浦て絶ふの底より

鳥城とこれと桶の水す

後度度此勤縛つましれの花

まつて丁ちきまつは中

半歌仙

あり経よ幹をわても桟の花
东风よ墨されと生る候会
塙れのうづこえ波よ日ひて
春宣一と西の方子夜に
月とて橋をと音もひやくと
て年よ階乃ひおぬねに
洗ふよもぬく娘紀乃照く
屏風のうちへやうほむ難
手とつて起ふ延ゆの川東

相坐相抱
月底底底底底底底底底

とんと時向と時作よ桜

吉井草よ湯立此座此吹のり

入り内四て櫻のまよ

けた旅もむだ惜う月は秋

舡内初舟とあくをらを

舟で起て陸ひうはく時雨

あくけて船のきくぬ切法

善きぬう是程候よう仕をき

譽くと海くとあひりのぬを

あくとひとりのね松

半歌仙

川口やあ側よする行くみ
手刻とくのと水を夏日
より付此壁と木とて
糸とてやまと水栓とく
青白此輕もゆきよと西あら
あくとひとりのね松

袋の中へつまらむお詫
夏の夜を度すかうお故に
やうりあく鶯はうるる
木をもあれど海を矢車下
まきまきひよ草むらら
はくちおや髪も結ふそ
亂縫きくほのまじる
泥棒をもつてゆくゆり
見ゆかねおなじくぬ
石渕と月の縁のさり
夏夜もやうすげの扇
新緑の音も空も詠よまと
今ごめんめがた作化へあ
桜の弓も折もえれまじはの
捨ててゆくゆくゆく

抱襟の尻よもじも身方卓
簾の間のはりよつとお槐若
とゆかゆかとくす根をき
十九の元れもとく大手
うね寝て是袋れ喰てゆき
鳴とひくのよ育が鷦子
あんまひもなまぬ佐よちる柳
二萬たとくのつも春糸
小便よ裸て起て月とくる
あせり前の時ちづけ
涼風もなまきて搖るぬむ鑒
まくも根またつゝ樹

半歌仙

時々今も初つて相此を義
月の夜やむ垣のあくま
湯船味曾つとむも虚せ算

丁知

由葉

白起

竹瘦てよく嘗れみるなり
梅種園のうそめれ垣

鳥穂ひとく言を用ひて

ざんぶり水もくのねみ

あれよ神か比夜よ出ら月

りづらと冷る橋の所

ち音すもちまわてそれぬみの

何よなむやら玉壳平羽織

えすと越ても音ぞくらぬ歌

あつじ音を園の見ゆ

風すけよとすそくい儀曲矣

やつて搏木も流を舞

門宿のむかしむれは月まで

轟と轟と細辛てゆく

翁うる度かの夢をまよひ

砂渦さわわはまゆみ

然山然山然山然山然山

山然山然山然山然山

半歌仙

半歌仙

花あよひかせむるなり
鶯道のあらかせ前付

蒼丸抱依

山あは事もやうなまぬれ
をのふりやうまほれ
せまれてつる石とゆのけて
鷺浦ねまむるあはくさく
つまうひき思ひのゆゑく
栗はうへばあうへす
よあははと離はぬゆゑ
塙内あは野よりしゆぬ
後をひもひまはふれと育あけ
擇浦へゆへとくの料理肩
わらくともどくは角丸

九

彦石ちのりくわやめさり

田中少 諸事を以て之の後
平時尤甚と風評有て之を

お詫びの事も尋ねま
す。桶井の門も

半
哥
仁

匍匐山毛比つまき家儀

是の禮は
月日を
ちよとぬるにあらず

物の身を取つては成らん
絶ふ時はあつてゐ側

教どりよ教取れづら生
繩

漢
女
傳
經
正
行
毛
衣

夜の霜のつづきより抜

卷之三

已往過年地內相之歸自
四柱之中不無也未甘

おまかせたまよはねえはす
月あらわすとあつゆる

三浦鉢よりえらぬ鏡のちり

之也。此猶可見也。

あのかうけまほ極北日和
半歌仙

持のほか以て之にて處すより
日暮ぢかに仕事の仕事

日記を手に取る

アラシの先よ湯邊のアラ

江蘇吳中華
印於北京

半歌仙

半歌仙

度行ぬの園行もる

や門とまよ禪のあまし極後

門主拜む。法教とく。

かく底玉橋も旭のてうつて

けく以てうよ別盡まくる

音也むらぬ尼を修の接頭

年年もくもくと方陣

自うのすもねくと斗跡も宿

喰結金比事もくともむ

宿跡へねくとふ華ノ御社

あてはく經事之殿ちく名

半歌仙

新錦て金はてする山並山
擦ちひあけの消り却大

壺をもさすとおとゆく

新うのすあらうは新うき

新机
新机

仰もちうせん引腰の八伎舞
風呂敷出でうすく松葉
西使參そく左脇もくらひ
まくら先くら姫くらく
志の服と絹針まくらけとく
ひつもくらうるくら素椀
入浴地面と地主と地主とく
オコモモくら節の童寢
降きうな月よもがお縮く
糸ともしくまむりた童寢
何のあも多洗濯す戸とあ
闇う海でもううぬ諸神
因業もきくめれをまみの叶
ありあれ多以嚴の

半歌仙

一束うな鶴のうな名和くあれ

菩提のひきり生葉を然
歌仙
 菩提酒達の體も御く
 あらゆる妙なりゆく湯夷一
 文代の詰便もとくに細めて未本
 善統あるだけ酒くま歌。玄
 あらゆる解る詰と詰と詰の月
 や、玄々と詰と詰と詰
 印々も詰と詰と詰と詰
 横本多てせんきく木本
 純の詰と詰と詰と詰
 本用あらうづと詰と詰と詰
 深の詰と詰と詰と詰と詰
 ちむきの詰と詰と詰と詰と詰

桂財のあらじ村の石付然く
 沙のまに水の薬油の以來て
 細煙のとくとくするも拂
 予供ある酒足させむ七月
 くわめて手けい物のを糸
 ちうとては拂除むをすぬ漏
 鼻血をもまた仰面で唇
 辛痛(あうりて)脣をもあり
 ほくの詰やうるをもと
 争易の門太れ経とのひはて
 厕の侍つこうら用詰
 糸詰の中北かみも面面き
 此をすくする山陽裏
 由達歌りたつの因てれを鑑

春加減といたしてどうり
先胸等も着けらる
をぬれたりとまく四事等
东风はいさぎのやうに
旅宿とゆきまくひゆき本
放下頭ゆてうなだらかと
あき緋を揺やうむる
ちゆる緋まくらねじと
とよともと春日を演のむ
零落したる羽筆は所
風ねぐ様まく純と扱ひ
妙理くじくも醫志此事
猶舞じてはねよき洗玉場
片手くはらひ月の解
船も秋もよりもくじ
ことひどりの聲の解本

歌仙

翁の壁は店に壁も一つの
身をもたらす年のなまむ
ねあらひの葉瓣けん底き本
持つふくらむ、所せ
教むの掃ふまくもく人
人をやんで立とどき地
本
歌仙

代へてさみよゑの舞掛

まじめ聲をばゑに歸りて

筆とく往つて見る極ん

あまむれりうもくと花の月

本町筋をばきく

ぬ十の時立能ふまむれ

因高寅内をかうがく

筑波にて越するあひ御

鉢の往來を汗の管知る

去年より千日もあひて重ね

候ちもううて重ねて重ね

あららうううううてぬ花

石ううあみ筆比うの歌を歌

就きてとお波理を才波勤に

片足もまふ片足もとふ

泥の沙塵を拂はうの縁

あくと止むまえあくね傳

杖つあひ仰めと仰き小波之

とく仰き都もあまに重すの

油煙とねまよ福を書け月

退くきけの枝を映る陽

故のうれ翁待て居れぬ

時のうりは絶待と門

五ツの星北駕を詠つて金

ちらくと花も咲く萬歩

除け草やとうは梅の芽

とくと乾くぬり門をく

百韻

底打高さ所すり地をうねり

おひつてうよりもやの内

拂掌とそつまうてなきむ

源里とおは葉巻うけむえ

かくちゆくよせあくまくあ

肩ときれい又昔も宣

草紙うつてやりうるはは

わらぬ病をうながすの

草紙うつてやりうるはは

おひつてうよりもやの内

古地吹ふむのうす極東

手作法と教わる事多し

ぬくめとあくまあのよ

堅物を深きうよりと

墨湯鹽をあくまゆと

袖うそとて不ぞうとれぬむ
今法もちよと付くまよ
義のれ是逃ととまうと油
足袋のまねくわ行うと
竹せう合せたりとよせをせ
凌育れ更ぐとてうもむ
み終泡の始あつて
そちへもやうは立消る雪
壇渡とひつもくとゆする
大抵すこそは前障ケ
提灯は燈ひもよとひき
いつのり鼓すむつみゆゆ
御海うすとくとくとゆる
ふとと移すとくとくとゆる
即待まくとくとくとゆる
音吹きけさせたれ様中

樹すやまむゆもえり
きよきよかづ風雲はるや
はえはれあまち方を教ふ
もまとももれへ馬も是まつ
からきて儀へてある緋あづ
らすすすすすすすすすす
ちんまりとねの精よ用のまも
白蛇うへうへうへうへうへ
轡すすすすすすすすすす
農者すとひとひとひとひと
す利うひと外あて此櫻拂
ううう塊の打う死ううう
を終じゆくもくもくと紙前
えと斗紙拂拂うき
えりくと墨で書きゆうりうき
とくわくもあ清めら

如空鳴如鳴如鳴如鳴如鳴如鳴如鳴如鳴如鳴

尼あとひのうて錦めくらを
おまかせぬと稱ておほほ
おもむれもうつ経ては萬すすり
はひくれどよりもひる
情うらむれ懺悔の心とおさせ
そろりとおまかせ被取てきる
侍まよつてうるとぞとぞ
井の水と井源のちよんと
のよし文子觸の論はとぞ
いふ様めり
西よきおもねりとぞ
れとおもねりとぞ
せせのめ水をもとぞとぞ
と經てたまつりとぞ
相ひとぞとぞとぞとぞ

そむ中ノ紙被底もつり賣おて

鶴の絵もれハ東夕中喰

ナリ往々其物のれであち

あづひううてまくら月

人左人のとよはづりのる

丹づめうせむけるたま

を散てあらまのタク清ノミ

あきぬすもねむたまつて歎を

めとまう處う墨おしまにき

あきれてあいふは素面

様子のまゆはむまゆは

どうくつしせて禮うひぬ

被紙向くも呂雉うまる

人の中國やもくしやくし

かくうも隊のあくす育

たゞみゆきをすまつかへ役
低以鷺居と紙と見る人
八浦の名勝不夏堂
玄根つ石けてとろと松
多才寺の塔の北付近壁
以てとくに推すある
上役の御前ある日あひて
凍え立つる候哉惟子
早春の花は咲くとて能ひて
暖簾と拂る矢善失ふ
ちみやへそへ一葉を拂ふり
さあそとて多度五度
吹風をねくはつと細う若
そくく神父のまく銘き

和漢

幕太なく廻りは低一新の雨
鷲鷺纏牆傳
ぬるに此處の宣詔をきて
会のへて草花れ春の
醉月下戸客
勝露多能仙
つらと本の疏をよの羅
枕一布引ち經神假
早起立高舍
長待喰門船
持子た極りうすりも物思ひ
念歸ヨリの時復帶
育く日向のめく袴は舞
秋風夜如年
幕也此純毛絹と面白之

素壹株毫遙
自宣賞花帽
霞深水涯
揬囊縫得綫
直了事も同居不應
樓閣麦素田
烈暉化山石
萬物立意の仲立
雪積隣高旗
物考ハ用事も傍扇にて
团扇素知指
白笠應ふレ吟
赤盆持てぬ隣の指鼻
雄三雄三雄三雄三雄
雄三雄三雄三雄三雄三雄

音見酒白川

十年比翼居りあひ友夫人

さむれ屏風と五段の文箱

歌もさよならほのちのあうき

陽炎外晴天

ぬけ音を放てぬく柳うす

遠香山咲叶玉新

春山含笑溪

春燕子ゆと春の聲は家

山月をかきこまくと暮なり

碎珊瑚忘冷塵

移川の傷を語る男とと

把行さけても此家會

香烟は年過

彷彿物光素真

思思思思思思思思

妾命為君拂

八島浦比奈治

流ス弓弓鶯川月

秋風空く寒く琴の音

冬と霜霰暖きうみゆ切て

孟汗の白山裏の門

忠切奏花樹

霜流行高圓

筆枯らすも筆を画せばん

さめうろけよ叫びまる

月分仲秋夜

霧潤物暮烟

かよふ事ふれぬ筆を假して

和漢

若れをとあらわす

空室隔故御圮
遊名里天

夙夜佛の事より翁の晚と
、身ヲ用ひてあ

田レ
朝ニ
木能

惜レ秋
田家
但

ナチハ危の事そぞる

大井川

わレ指 算
テ フ ニ ヘ

高めてゆきりせよせゆの松

まくらのうたのうと立正院

THE HISTORY OF THE AMERICAN REVOLUTION

國
籍
門
禁

國 蘭 閃 燭 速
ヒサ ツク リ ツク リ

鬻鬻情權上天下執事

雨 晴 待 高 觀

多めの床の幕あり
ぬうよ様へせぬひそり

暮 暻 風 高 烏
サラシ レ ニ ク
道、至テ 時ニ
須ル 矢

近 徒 月 足

暮雲花竹
の
放

○和済の和歌の韵を编す済和和歌も
韵をより严厉に和済済和歌も其のまゝ
也つまし作例もあつて、その和

漢漢和の例ノ石鳥集と云書三百絵數卷
あり傳人仁高至多鳥類也山組色組鷦
夷名法也其比鷦夷之山之他因時有名
亦悉く見えたり至後芭蕉と云事せばわ
浮き生あてて至集序起句の松よまきを
又芭竹集れゆつち松屋のわ浮くわ夢
松季翁の浮かび依てからす

新選
俳諧 明治歳時記栢草卷之下 終

鶴の呻き萬の歌ハ
美の事何するか
せあるる是れくはすくて
ましくおあらうか
子ひ多福五博の
福子仰階年々
より多かの去勝手の

諸君の筆を以て今之世よ

お哀れと號く時の筆を

蓬生あらわる處を

昭治ゆり仰せよおひま

力も重きやあいの事で

森林夕照をうける方

はやばはるの増は絶

桜や世夢く常えと

春風にゆきむ今一枝

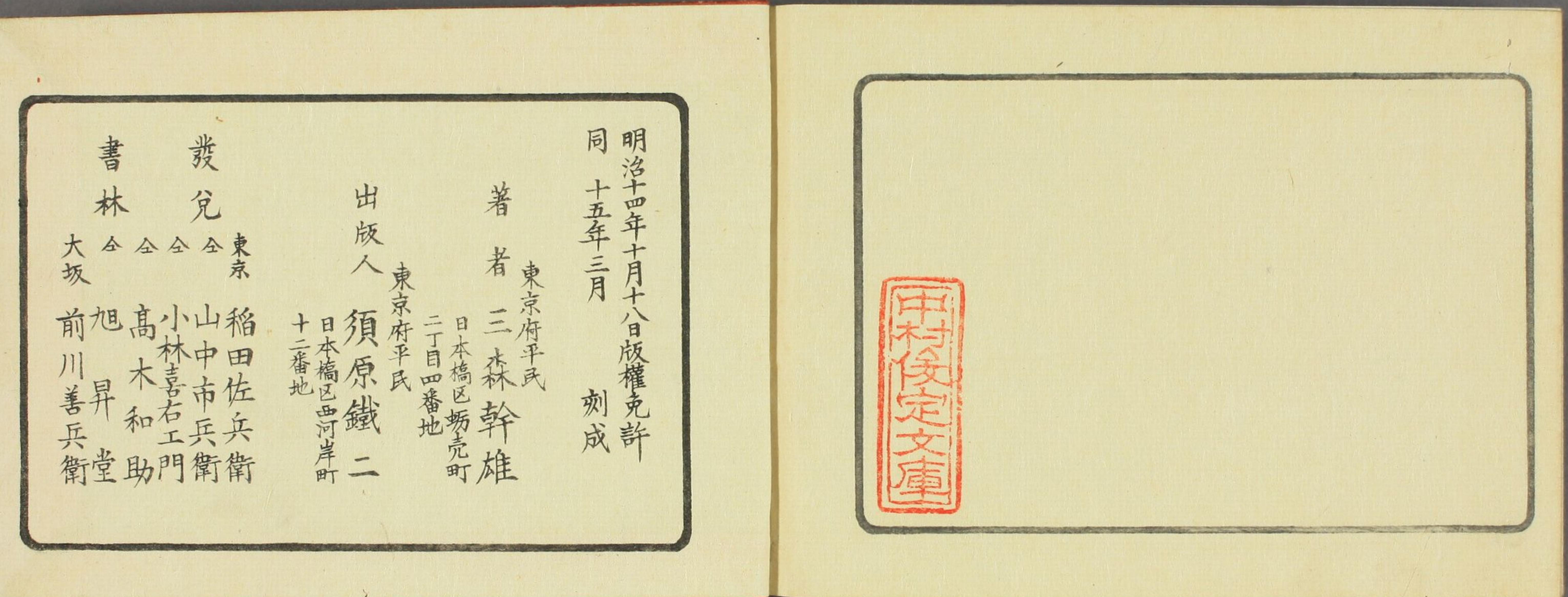
春風にゆきむ今一枝

一あはれと計程

明治三十五年

東京農業大学
のちの
収集





明治十四年十月十八日版權免許
同十五年三月 刻成

著 東京府平民 三森幹雄

日本橋区蛎壳町
二丁目四番地

出版人 須原鐵二

日本橋区西河岸町
十三番地

叢兌

東京

稻田佐兵衛

書林

全

高木和助

大坂

前川善兵衛

昇堂



